

Based on the life of BRIAN WILSON

LOVE & MERCY

The True Story of Brian Wilson



RIVER ROAD ENTERTAINMENT presents a RIVER ROAD/BATTLE MOUNTAIN FILMS production JOHN CUSACK PAUL DANO ELIZABETH BANKS and PAUL GIAMATTI "LOVE & MERCY"
Casting by KERRY BARDEN and PAUL SCHNEE Costume Designer DANNY GLICKER Score by ATTICUS ROSS Editor DINO JONSSÄTER, SFX Production Designer KEITH CUNNINGHAM
Director of Photography ROBERT YEOMAN, ASC Executive Producers ANN RUARK JIM LEFKOWITZ OREN MOVERMAN Produced by BILL POHLAD CLAIRE RUDNICK POLSTEIN JOHN WELLS
Based on the life of BRIAN WILSON Written by OREN MOVERMAN and MICHAEL ALAN LERNER Directed by BILL POHLAD

KADOKAWA

[NYSE: LGF] LIONSGATE

© 2015 Malibu Road, LLC. All rights reserved.

RIVER ROAD
ENTERTAINMENT

ブライアン・ウィルソン公認!

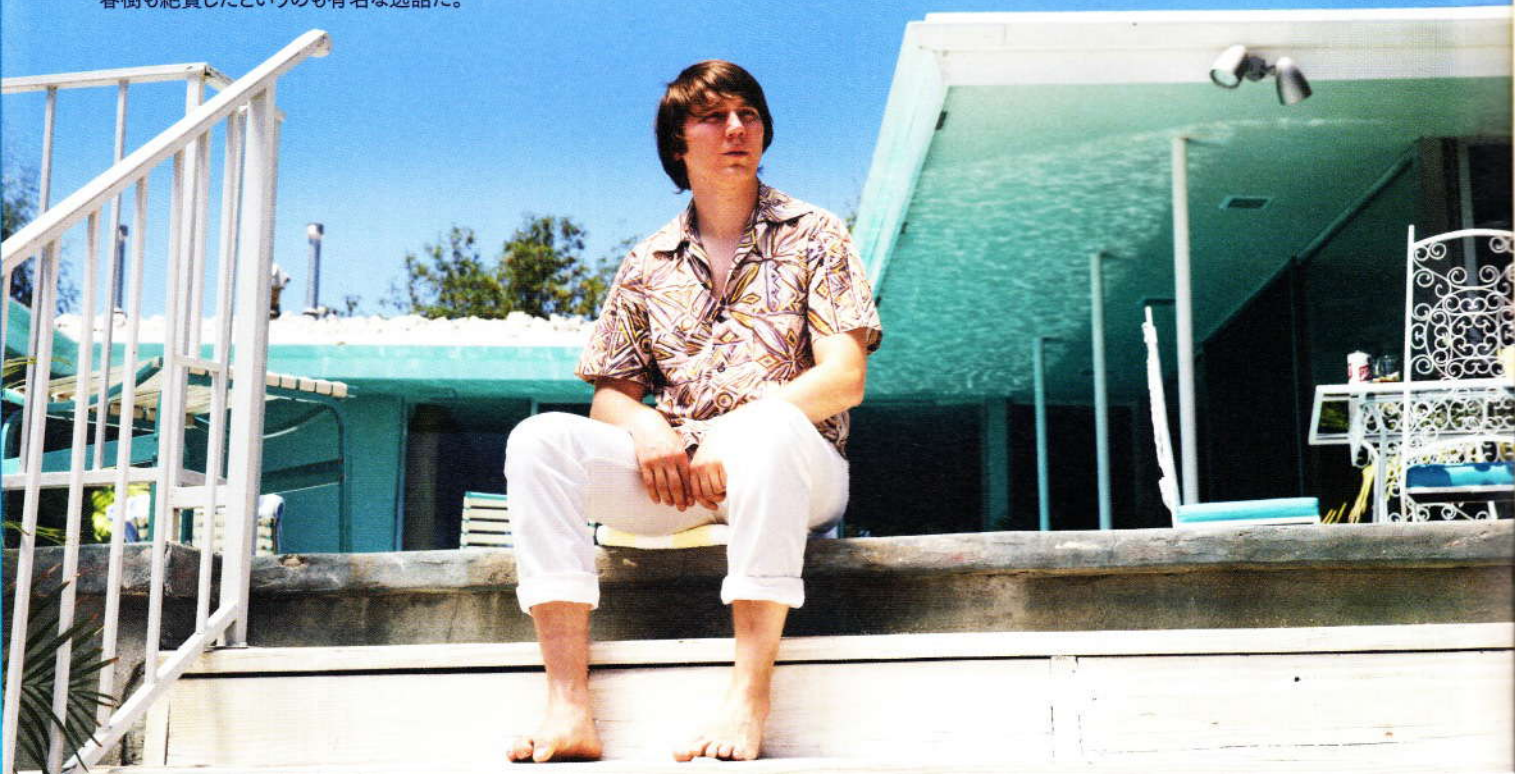
アカデミー賞®受賞スタッフが、ザ・ビーチ・ボーイズの知られざる真実を遂に映画化!

ワンフレーズを聴いただけで、心が浮き立つメロディーがある。なんとなく口ずさむだけで、笑顔になる歌がある。ザ・ビーチ・ボーイズの中心的存在だったブライアン・ウィルソンが生み出したのは、間違いなくそんな曲だ。「サーフィン・U.S.A.」、「素敵じゃないか」、「グッド・ヴァイブレーション」——誕生から半世紀を経た今も、映像作品やCM、街角やカフェで頻りに流れている数々の名曲は、今日も世界のどこかで、誰かの傷ついた心を優しく温かく包み込んでいる。

時代を越えて愛され続けるなかで、ザ・ビーチ・ボーイズの音楽的評価は絶対的なものとなった。なかでも発表当時は斬新すぎてファンや評論家を戸惑わせたアルバム『ペット・サウンズ』が、現在ではポピュラーミュージック史上不世出の傑作と称えられ、後世のミュージシャンに多大な影響を与え続けている。ポール・マッカートニー、山下達郎、村上春樹も絶賛したというのも有名な逸話だ。

だが、それらの曲を作っていた時、ブライアン自身は、決してHappyではなかった。それどころか、彼の魂は苦悩に引き裂かれ、極限まで壊れていた。いったい何がそこまで彼を追い詰めたのか? それでもなお天使の歌のごとき美しいメロディーが生まれた理由とは?

奇跡の復活を遂げ、73歳になった今も“生きる伝説”として活躍しているブライアンが、その答えを世に明かすことを認めた相手は、アカデミー賞®作品賞に輝いた『それでも夜は明ける』や、『ブロークバック・マウンテン』、『ツリー・オブ・ライフ』のプロデューサー、ビル・ポーラッド。素晴らしい題材に心を動かされたポーラッドは、監督デビューを決意。稀有なる天才の謎に包まれた心の内と、名曲が生まれるまでの秘密に迫る、感動の物語を完成させた。





Brian Wilson

ブライアン・ウィルソン

ポピュラーミュージック界で、最も深く尊敬されている人物の一人。伝説的なソングライター、プロデューサー、アレンジャー、パフォーマーであり、過去50年で最も才能に恵まれ、影響力のある作曲家と言っても過言ではない

劇中のビーチ・ボーイズと

HISTORY

- 1942** 6月20日、アメリカ・カリフォルニア州イングルウッドで生まれる
- 1961** 弟のデニス、カールと従兄弟のマイク・ラヴ、高校の友人アル・ジャーディンと共に“ザ・ペンデルトーンズ”を結成
12月、シングル「サーフィン」をキャンディックスレコードよりリリース。その際、レコード会社により、バンド名が“ザ・ビーチ・ボーイズ”に変更された
- 1962** キャピトル・レコードと契約し、6月に初シングル「409 / サーフィン・サファリ」リリース。9月にはビルボード・チャートで30位を記録した
10月、ファースト・アルバム『サーフィン・サファリ』発売。ビルボードチャートに37週にわたってランクイン
- 1963** 3月、アルバム『サーフィン・U.S.A.』発売
9月、アルバム『サーファー・ガール』発売



サーフィン・サファリ
TOCP-53161
ユニバーサルミュージック



サーファー・ガール
TOCP-71372
ユニバーサルミュージック

196

196

196

197

197

197

197

198

198

198

199

199

199

199

200

200

201





『80年代のブライアン・ウィルソン』

ジョン・キューザック

John Cusack

イリノイ州エバンストン生まれ。父はドキュメンタリー映画の製作をしており、姉のジョーンや兄弟も俳優である。『恋のスクランブル』(83)でスクリーンデビュー。『シニア・シング』(85)、『セイ・エニシング』(89)などの青春映画に出演。友人と立ち上げた映画製作会社、ニュー・クラ임・プロダクションズ製作の『ハイ・フィデリティ』(00)は、ゴールデン・グローブ賞®にノミネートされた。そのほか『マルコヴィッチの穴』(99)、『セレンディピティ』(01)、『さよなら。いつかわかること』(07)、『推理作家ボー 最期の5日間』(12)、『大統領の執事の涙』(13)、『マップ・トゥ・ザ・スターズ』(14)、『ドライブ・ハード』(14)など出演作多数。また、自身が主宰する劇団では、脚本・演出も手掛ける。

Comments 僕が演じるのは、自分らしさを取り戻そうと奮闘していた時期のブライアンだ。大きな痛みを伴っているけれど、同時にそれは、彼がメリンダと恋に落ちて、自らの焦点を設定し直した時期でもある。ブライアンとメリンダ、そして彼らの関係の本質を知るために、僕は二人とできる限り時間を過ごしたんだ。ブライアンを救ったものは、彼の内側にある何かだけれど、その正体を口で説明するのは難しい。彼は別の世界から聞こえた音をこの地平に持ちこんでるんだ。偉大なアーティストは誰もがそうだと僕は思うよ。



『60年代のブライアン・ウィルソン』

ポール・ダノ

Paul Dano

ニューヨーク州ニューヨーク生まれ。10歳の頃にスカウトされ12歳でブロードウェイの舞台に立つ。17歳の時に『L.I.E.』(01)でスクリーンデビュー。『キング 罪の王』(05)でガエル・ガルシア・ベルナルと、『The Ballad of Jack and Rose』(05・未)ではダニエル・デイ＝ルイスなど多くのベテラン俳優と共演。『リトル・ミス・サンシャイン』(06)や、英国アカデミー賞出演男優賞にノミネートされた『ゼア・ウィル・ビー・ブラッド』(07)で注目され、『ルビー・スパークス』(12)では主演と製作総指揮も務めた。そのほか『ナイト&デイ』(10)、『LOOPER/ルーパー』(12)、『それでも夜は明ける』(13)、『プリズナース』(13)などに出演。若手俳優の中でも演技派として最注目の人。自身のバンド“Mook”ではギターとヴォーカルを担当しており、本作でもブライアン本人に負けない歌声を披露している。

Comments ブライアンにとって音楽こそが、真の母語なんだと思う。最も真実に近い彼の姿はおそらく音楽の中にある。とりわけ感情がむき出しになったアルバム『ベット・サウンズ』の中にね。ブライアンは音楽と歌詞の両面で、より奥深い何かを表現しようとしていた。

この映画は、彼の作品に対する人々の見方を変化させるかもしれない。僕にとっては間違いなくそうだったし、その体験には興奮させられた。彼の音楽を知っていたけれどよく理解していなかった僕にとって、これは啓示的体験だった。



『マイク・ラヴ』

ジェイク・アベル

Jake Abel

オハイオ州カントン生まれ。05年、ディズニー・チャンネル・ムービーの『Go! フィギュア』でデビュー。『幸せのきずな』(08・未)でハンプトン国際映画祭ライジング・スター賞を受賞。そのほか『ラブリー・ボーン』(09)、『パーシー・ジャクソンとオリンポスの神々』(10)、『パーシー・ジャクソンとオリンポスの神々: 魔の海』(13)、『ザ・ホスト 美しき侵略者』(13)、『ドローン・オブ・ウォー』(2015年秋公開)などに出演。『SUPERNATURAL スーパーナチュラル』などのTVシリーズにもゲスト出演している。



『デニス・ウィルソン』

ケニー・ウォーマルド

Kenny Wormald

マサチューセッツ州ストートン生まれ。6歳でダンスを始め、数々のダンスコンテストで受賞。プリンス、マドンナ、マライア・キャリー、クリスティーナ・アギレラ、ジャスティン・ティンバーレイクなどのアーティストのミュージックビデオやツアーに参加。『センターステージ2/ダンス・インスピレーション!』(08・未)で主演を務めたほか、大ヒット作『フットルース』(84)のリメイク版となる『フットルース 夢に向かって』(11・未)でも、オーディションで選ばれ主演を務めている。

インタビュー ビル・ポラッド監督



♪企画について

この10年から15年、『ベット・サウンズ』にはまってね。ブライアン音楽が好きになった。奇妙なシンクロシティか何だか分からないが、それから間もなくして当時は別のタイトルだったこの映画の脚本に通り会ったんだ。企画について考え始めた時、興味を惹かれたのはブライアンの人生の2つの時期だった。初めから伝記映画を作る気はなかった。『ベット・サウンズ』で、ブライアンはサーフ・ミュージックと決別して別のことをやろうとした結果、メンバーと衝突することになる。ある特定のジャンルで成功を取めた場合、誰もが同じことをやり続けることを望むのは普通のことだ。でもアーティストとして、ブライアンは新しいことをやろうとしていたし、それは彼の人生における決定的な時期だったと思う。そして興味を惹いたもう一つの時期は、メリンダと出会ってからだった。彼女自身と、彼女がブライアンに出会った経緯に惹かれた。ある女性が、いくぶん風変わりな、問題を抱えている男に偶然出会う——その男は実はブライアン・ウィルソンだった。この2つのポイントが僕の中で共鳴し続けて、2つの主要なストーリーラインが形成されたんだよ。

♪ブライアン役に2人の異なる俳優をキャストしたことについて

これは僕が最初から強いこだわりを持っていたクリエイティブ面での決断だった。そのほうが彼の人生を理解しやすいし、独創的だ。2人の俳優がそれぞれの時期のブライアンを演じるのも面白い。ブライアンのベルソナや精神状態、彼が経験したことをより忠実に反映したものができると思ったんだ。それで映画はさらにダイナミックなものになるとね。それぞれの時代設定の序盤では、観客は彼らが同一人物だとはよく分からない。映画が進んでいって初めて、その事実が明確になっていくんだ。

♪60年代のブライアンを演じたポール・ダノについて

ポールはキャストिंगのファーストチョイスだった。僕は常々彼のことを素晴らしい俳優だと思っていたし、いつか一緒に仕事をしたいと願っていた。若い頃のブライアンとポールは外見的に似通ったところがあって、その点に僕は心を躍らせていたんだよ。でもそれだけでなく、ポールがこれまで演じてきた役柄——そのなかには好意を抱くのが少し難しいような、暗く恐ろしい役柄もあった。だからこそ彼が、この優しく繊細で、愉快で奇妙で、さらに独自の在り方で紛れもなく天才である人物を演じるというのは、エキサイティングなアイデアだった。ブライアンは若さと可能性の象徴であり、自らの創造性を持ってどこに辿り着けるかを表象する存在だった——そしてポールは、あくまでポジティブでありながら、同時に深みのある興味深いキャラクターをしっかりと演じてくれた。

♪後年のブライアンに扮したジョン・キューザックについて

80年代のブライアンを演じる俳優選びは少し困難だったよ。ブライアンの見た目は10年の間にも様々に変わったからね。悩んでいるときに『Brian Wilson: I Just Wasn't Made for These Times』というドキュメンタリーを見て、ブライアンのイメージが浮かび、ジョン・キューザックのことを考えた。一度、頭に浮かぶと彼がぴったりだと思った。彼のような名優が演じるのにふさわしい役だ。彼があまたの苦難を経験し、ダメージを受けた男を演じるのは本当に刺激的なことだよ。

♪音楽について

これはブライアン・ウィルソンの人となりを描き出すことを意図した映画だった。もちろん彼自身の音楽とビーチ・ボーイズとの関わりは、ブ

孤高のアーティストが、
真の自由を手に入れるまで

長谷川町蔵
(ライター&コラムニスト)

ビーチ・ボーイズのメンバーとしてではなく、ソロ・アーティストとしてのブライアン・ウィルソンを描いた物語。『ラブ&マーシー 終わらないメロディ』を観てそう思った。ビーチ・ボーイズのファンなら「何をバカな」と思うかもしれない。というのもブライアンはバンドのほぼ全てのヒット曲を作曲し、多くの曲でリード・ヴォーカルを取っていたバンドの中心人物だからだ。

カリフォルニアのホーソン市に生まれたブライアン、デニス、カールのウィルソン兄弟が、いとこのマイク・ラブ、友人のアル・ジャーディンと61年に結成したビーチ・ボーイズは、出身地であった南カリフォルニアの太陽や海といった自然、そしてこの地で勃興しつつあったサーフィンやホットロッドといったユース・カルチャーを歌って、瞬く間にトップバンドの座にのぼりつめた。

しかしバンドの楽天的なイメージと、ブライアン自身の内向的な性格は遠いところにあった。明るく軽快な初期ヒット曲ですら、憂いがふと顔を覗かせる瞬間がある。ブライアンが64年末にステージ活動を退いてレコーディングに専念したことで、こうしたテイストはますます音楽面に反映されるようになっていった。また彼はそれまでも一部で起用していたスタジオ・ミュージシャンを全面起用

し、ホーンやストリングスをフィーチャーしたロックの枠組みを超えるような音楽を作りはじめた。

「下手でもすべて自分でやったほうが価値がある」という考えは60年代半ばにビートルズとロックに転向したポップ・ディランによってもたらされた新しい流行にすぎない。「永久に残るレコードの演奏は、ツアーメンバーではなく最高のプレイヤーが行なう」というポピュラー音楽の伝統がこの時代のアメリカではまだ健在だった。特にロサンゼルスには「レッキング・クルー」と呼ばれる腕利きスタジオ・ミュージシャン集団があり、ロネッツ「ビー・マイ・ベイビー」やバース「ミスター・タンブリン・マン」、サイモン&ガーファンクル「明日に架ける橋」まで、ありとあらゆるレコードで演奏していた。

そんなレッキング・クルーをバックに、孤独や喪失感を歌ったのが66年のアルバム『ベット・サウンズ』だった。現在ではロック史上に残る傑作として知られているアルバムだが、当時の所属会社キャピトルは内容に戸惑い、プロモーションの手を抜いた。最大のライバルだったビートルズのようにアーティスト路線に変身したバンドとして売っていくことも出来たにもかかわらずだ。

でもビートルズとの戦いは初めから勝負がついてい



